様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０９５４

研究課題名（和文）慣習文化と宗教のダイナミクス－ラ・ガリゴ叙事詩の世界遺産化と地域文化の創造

研究課題名（英文）Dynamics of custom culture and religion - creation of local culture after the recognition of La Galigo epic as World Memory

研究代表者
伊藤　眞（ITO, MAKOTO）

首都大学東京・人文科学研究科・客員教授

研究者番号：６０１８３１７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：世界最長の叙事詩と言われる『ラ・ガリゴ』は、1950年代に起きたダルル・イスラーム（イスラーム国家建設）運動によってその文化的価値を否定された過去をもつ。しかし、2011年にユネスコによって『世界記憶遺産』に認定されたことを契機として、その文化遺産としての価値が国内外に認められることになった。本調査研究では、『ラ・ガリゴ』叙事詩の『世界記憶遺産』認定をきっかけとして南スラウェシで起きた社会文化的な活動に注目し、地方文化の復興と創造という観点からその意義を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：“La Galigo” which is said to be the longest epic in the world has once denied its cultural value by the Darul Islam movement in the 1950s. However, after being recognized as “Memory of the world” by UNESCO in 2011, it has become appraised as a cultural heritage both domestically and abroad. In this research study, attention was paid to the social and cultural activities that occurred in South Sulawesi triggered by the “Memory of the world” nomination of “La Galigo” epic, and examined from the viewpoint of reconstruction and creation of local culture.

研究分野：文化人類学

キーワード：ブギス語　慣習文化　イスラーム　神話　世界記憶遺産　ラ・ガリゴ叙事詩　地域語教育　地域文学

１．研究開始当初の背景

本研究において焦点をあてる『ラ・ガリゴ』(La Galigo)叙事詩とは、南スラウェシのブギス社会に伝わる長大な文学的遺産であり、フォリオ紙で約 6 千頁有余、世界で最長の叙事詩である。『ラ・ガリゴ』叙事詩は元来、口頭で伝承されたと考えられるが伝承過程でロンタラ文字に表記されるようになった。19 世紀半ばには、オランダ人研究者によりそのロンタラ文字からなる 12 巻の手稿本が収集され、後にライデン大学図書館に所蔵された（文書番号 NBG188）。その内容は、天界の創造主により、ブギス族の「故郷」といわれるルウの地（南スラウェシ州北部）に遣わされ、最初の王国を建設するバタラ・グルとその子孫ら６世代の神話的な事蹟、英雄譚である。中でもバタラ・グルの孫サウェリガディンは放浪の王子としてブギスにおいて文化英雄的な存在である。

『ラ・ガリゴ』叙事詩が注目されるのは、そこに描き出される記述が、ブギス諸王国が 17 世紀初頭にイスラーム化される以前の生活や宗教信仰、世界観を映し出す貴重な資料となると考えられるからである。ただし、『ラ・ガリゴ』叙事詩の全容は今日に至るまで解明されておらず、かつライデン大学以外の諸外国の文書館等に所蔵された手稿はデジタル化も進んでおらず研究者がアプローチすることさえも困難な状況である。『ラ・ガリゴ』叙事詩の概要を知るには、オランダ、ドイツ、イギリス、そしてマカッサルの文書館に所蔵された稿本について詳細な内容目録を作成した文献学者ケルンによる 1000 頁に及ぶ大著『ラ・ガリゴ目録』(R.A.Kern 1939; 1954)が唯一といってよい導入の手掛かりとなっている。

同書のインドネシア語訳が 1987 年にインドネシアで出版されて以来、インドネシアの研究者も同叙事詩の概要を知ることができるようになった。また先の『ラ・ガリゴ』叙事詩のインドネシア語訳は第 1 巻が 1995 年、第 2 巻が 2000 年、そして第 3 巻が 2017 年に刊行されているに過ぎない。

このように『ラ・ガリゴ』叙事詩のインドネシア語への翻訳作業の進行は、遅々とした状況であるが、2011 年のユネスコによる「世界記憶遺産」認定をきっかけに、『ラ・ガリゴ』叙事詩への関心は徐々に高まりつつある。中央・地方政府の支援も始まり、若い世代によって『ラ・ガリゴ』叙事詩を翻案した演劇化や小説化も試みられるようになった。それ以前、『ラ・ガリゴ』叙事詩は、旧貴族層などが保管する古文書として、あるいは「トロタン」と称される、先イスラーム的な信仰集団と結びつけてしばしば語られてきたが、今日では、ブギスの伝統文化を象徴する文化的シンボルとして新たな地位を獲得しつつある。南スラウェシの人々が、『ラ・ガリゴ』叙事詩の中にどのような文化的価値を見出し、地域文化の中に位置づけていくかが今や問われているのである。

２．研究の目的

スハルト退陣後の 2001 年に施行された地方分権二法以降のインドネシアを特徴づけるのは、民主化と地方分権化の流れである。各地で慣習(アダット)の復興が叫ばれる一方で、イスラーム復興の中でイスラーム法に基づくシャリア条例が一部施行される県もある。南スラウェシに伝わる『ラ・ガリゴ』叙事詩は、イスラー国家建設を標榜するダルル・イスラームの反乱が続いた 1950 年代、その文化的価値を否定された歴史をもつ。しかし、海外での『ラ・ガリゴ』研究が進むにつれ、徐々にその文化的価値が認識されるようになり、2011 年には、『ラ・ガリゴ』叙事詩はユネスコにより『世界記憶遺産』として認定された。この出来事が、とりわけ若い世代に刺激を与え、『ラ・ガリゴ』叙事詩に対する関心を飛躍的に高める結果に導いたのである。それは同叙事詩に内発された出版物や演劇活動の中に見出されるだろう。

若い世代は『ラ・ガリゴ』叙事詩の中にどのような価値を見出すことになるのか。本研究では、『ラ・ガリゴ』叙事詩が今日の南スラウェシの地方社会において果たしうる社会文化的意義について、慣習文化と宗教とのダイナミクスという文脈において、多面的な角度から明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1)本研究ではまず『ラ・ガリゴ』叙事詩を伝承に基づく文学作品というよりも、それに関わる諸事象を含めた「社会学的現象」として捉え、それに関わる文書情報、とくに地方分権化が進む 2001 年以降に重点をおき、新聞記事、出版物、県及び州政府の文化・観光政策、伝統行事開催に等に関する文書などを収集する。そして収集した作業から地方政府、慣行文化支持者、イスラーム団体などによる慣行文化についての見解を整理する。

(2)慣行文化の影響力が強いとされる地域(とくにトロタン信仰が見出されるシドラップ県)とイスラーム主義の影響の強い地域（ブルクンバ県など）における聞き取り調査により、『ラ・ガリゴ』に関する住民の理解とその変化を世界記憶遺産の登録認定時期に留意しながら跡づける。

(3)地域の文化芸術活動に関わる人々、とりわけマカッサル作家同盟のメンバーからの聞き取り調査をおこなう。南スラウェシでは、学術出版物の刊行に積極的な小出版社が多数存在するので、そうした文化活動を支える人物からも聞き取り調査をおこなう。

(4)以上のデータを整理分析することで、南スラウェシにおける『ラ・ガリゴ』叙事詩についての受容、解釈とその変化についてまと

め、同叙事詩の社会的役割を明らかにする。

４．研究成果

(1) 国立文書館（ジャカルタ本館及びマカッサル分館）において、『ラ・ガリゴ』叙事詩稿本のカタログを精査した。所蔵される稿本の多くは、かつてフォード財団の助成によりマイクロフィルム化されたもので約 4000 点にのぼる。また、かつてケルンが目録作成を試みたマカッサルの旧「南及び南東スラウェシ文化協会」所蔵の稿本は、一部は国立文書館マカッサル分館に移管されたが、当時に比べ半ば近くが紛失していることが判明した。一方、国立文書館マカッサル分館から刊行された『ロンタラ文書目録』によれば、南スラウェシにおいてマイクロフィルム化された稿本のうち、『ラ・ガリゴ』と分類される稿本の半ば近くは、一般に「ガリゴ」と称される「三毛猫の物語」（稲の女神とその従者の三毛猫が定着の地をもとめて各村を回るというストーリー）であり、本来の『ラ・ガリゴ』叙事詩に直接関わるものではないことが判った。「三毛猫の物語」は田植え前の農耕儀礼において朗唱される。

(2)宗教省により、1966 年以来ヒンドゥー教の一分派という位置づけを与えられているトロタン信仰は、現地研究者によっては『ラ・ガリゴ』を聖典とすると説明される場合がある。しかし、実際には、『ラ・ガリゴ』の冒頭部分に登場する創造主パトトエや放浪する王子サワリガディンの名があげられる場合はあっても、『ラ・ガリゴ』そのものが聖典視されるという事実は得られなかった。一方、イスラーム主義が強いといわれる地域において『ラ・ガリゴ』叙事詩の内容が非イスラーム的であるとして排除するようなケースは見出されなかった。

(3) 『ラ・ガリゴ』叙事詩の世界記憶遺産化の影響を確かめるために、文学や演劇活動に注目した結果、同叙事詩の小説化、エピソードの翻案演劇化などの試みが見出された。とくに 2011 年に設立された「マカッサル作家同盟」と「ルマタ」（「私たちの家」の意）は南スラウェシの若い作家や詩人、映像作家を主たるメンバーとし、民族を超えた文化活動を展開している。一人の映像作家は、『ラ・ガリゴ』叙事詩 12 巻の翻訳に人生を捧げた在野の人物の伝記映画も制作している。

(4)当初予定していた『ラ・ガリゴ』叙事詩稿本(NBG188)のデジタル化については、オランダ・ライデン大学中央図書館とインドネシア側のラ・ガリゴ協会（会長はブギス出身のユスフ・カラ現インドネシア副大統領）との交渉により、デジタル化が 2017 年に実現した。それ以前、インドネシアの研究者は書写原本を確認するためにはライデン大学に赴かねばならなかったが、これによりインドネシアにおいて原本の確認や翻訳作業が可能になった。なお、筆者は全 12 巻 2994 頁に及ぶ写真ファイルを入手することができたので、それを DVD に保存し、一式をハサヌディン大学文化学部地域文学専攻及び海外研究協力者である同大学ヌルハヤティ教授とディアス講師に寄贈した。

(5)本科研の施行年度内にハサヌディン大学で開催を予定していた『ラ・ガリゴ』セミナーは、当初の計画から大きく展開することになり、同大学文化学部と南スラウェシ州ソッペン県との共催で、「ラ・ガリゴ国際フェスティバル」として 2018 年 10 月 25-31 日の 1 週間にわたって、ソッペン県において開催されることになった。内外の研究者による研究発表と舞踊演劇公演を交えたこのフェスティバルには、筆者も講演者として招待されているので、本科研の調査研究成果を発表する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

① 伊藤眞、ブギス族のトランスジェンダー－ビッスとチャラバイ、アジア遊学、査読無、290 号、2017、72-86。
② 伊藤眞、イラガリゴ叙事詩への道、人文学報、査読有、513-2 号、2017、1-19。https://tokyo-metro-u.repo.nii.ac.jp/index.php?action
③ 伊藤眞、ブギス民族団体の形成と発展、アジア文化研究所研究年報、査読無、51 号、2017、164-166。
④ 伊藤眞、ビトゥンの日本人墓地から－沖縄、南洋、ミナハサ－、人文学報、 査読有、512-2 号、2016、17-35。https://tokyo-metro-u.repo.nii.ac.jp/index.php?action
⑤ 伊藤眞、タワウ――移民社会におけるゆるやかな統合、アジア文化研究所研究年報、査読無、50 号、2016、110-113。
⑥ 伊藤眞、インドネシアにおける高齢者の組織化－東ジャワ州の事例から－、人文学報、査読有、498 号、2015、12-29。https://tokyo-metro-u.repo.nii.ac.jp/index.php?action
⑦ 伊藤眞、サバのブギス移民と民族団体、アジア文化研究所研究年報、査読無、49 号、2015、24-27。

〔学会発表〕（計５件）

① Makoto Ito, “Calabai and Bissu’ among the Bugis : their role as a cultural performe”, Seminar of Religionization at Margins in Insular Southeast Asia: Introducing Recent Southeast Asian Studies in Japan, 2018 (Asian research Institute, The National University of Singapore （シンガポール大学アジア研

究所主催).

② Makoto Ito, "Migrasi, Identitas dan Diaspora Bugis di Daera Perbatasan Tawau-Saba", Konferensi International Bahasa, Sastra, dan Budaya Indonesia, Ikatan Dosen Budaya Daerah Indonesia (IKABUDI) VII, 2017（第７回全インドネシア文化学部講師連合国際学会、ハサヌッディン大学文化科学部主催、使用言語:インドネシア語）.

③ Makoto Ito, "Comparative Study of Ageing, Modernization, and Socio-cultural transformation of Communities in Java and South Sulawesi", Forum Diskusi P2SDR#2,LIPI, 2017(インドネシア中央科学院主催).

④ Makoto Ito, "New Development or Transformation of the Bugis Association in Sabah, Malaysia", Consortium for Southeast Asian Studies in Asia, Kyoto, Japan.2015(京都大学東南アジア研究所主催).

⑤ Makoto Ito, "Practicing Sociology of Education through Fieldwork: how did I approach Indonesian Domestic Workers in Hong Kong and what did I learn from them?", The First International Conference of Sociology Education, Indonesia University of Education, Bandung,2015（インドネシア教育大学社会教育学部主催）.

〔図書〕（計３件）

① 伊藤眞、共著、慶應義塾出版会、『東南アジア地域研究入門２社会』、2017、163-180。

② 伊藤眞、共著、弘文堂、『現代家族ペディア』比較家族史学会編、2015、277-279。

③ 伊藤眞、共著、公益財団法人特別区協議会・首都大学東京オープンユニバーシティ、『市民のための自治入門セミナー　講演概要』、2014、115-132。

６．研究組織

(1)研究代表者

伊藤　眞（ITO, Makoto）

首都大学東京・人文科学研究科・客員教授

研究者番号：60183175

(2)研究分担者　なし

(3)海外研究協力者

ヌルハヤティ・ラフマン（NURHAYATIH, Rafman）

ハサヌディン大学・文化学部・教授・文献学

ディアス・パラディマラ　(DIAS, Paradimara)

ハサヌディン大学・文化学部・講師・歴史人類学